

春夏秋冬 台湾徒然

第29回

封印された慰霊碑

柳本通彦

2年前5月号の本誌に台湾人元従軍看護婦を紹介したことがある。黄玉緞さん86歳、台湾の陸軍病院に勤務中、フィリピン・ルソン島に派遣され、ジャングルの中で地獄の逃避行を経験した人である。

彼女からの今年の賀状は解説不可能だった。小さな達筆の字で葉書いっぱいにお便りをくれる人が、なんとしたことだろうと思っていたところ、二つ目の手紙でようやく事情を理解した。年末に脳卒中で倒れ、何とか命をとりとめたものの、いまは私立の老人ホームに入っているという。

早速見舞いに行くと、四人部屋の隅に陣取って、目を赤くして迎えてくれた。上半身は元氣そうだが、ひざがまったく動かなくなり、お湯ひとつも誰かに頼まねばならない状態のようだ。

食事が不満らしく、ベッドサイドの机にはカップの味噌汁や饅頭が置いてある。世話をしている職員は外国人労働者で、チップをやらないと買物にも行ってくれないと愚痴がでる。それよりなにより、1カ月8万円の入院費用の工面がいつまで続くかと、それが黄さんの胸を圧迫しているようだ。

この黄さんが突然襲った病魔と格闘していたころ、同じ台北県では、ちよつとしたトラブルが持ち上がった。この県の公園のなかに建てられた日本語の碑に批判の声があがったのである。

それは、もともと烏来^{ウライ}という原住民居住地にあった元日本軍人軍属の慰霊碑とその周辺の碑群なのだが、私有地から公有地に移される段階で、その内容が問題となった。すなわち、碑には、「英霊」「大和魂」「皇民」など往時の



台北県によって密封された慰霊碑

戦争を賛美する言葉が日本語で綴られていて、視察に訪れた県知事が「これは日本ではない」と火のように怒り、撤去を命じたのである。この碑の移転費用として、日本人が3000万円も

の金を持ち込んだという。かの戦争に動員された台湾人は20万人、そのうち5万人以上が生還しなかった。戦死が確認された人にはわずかながら200万円の弔慰金が支給されたものの、彼らには恩給も年金もなく、生還者にいたっては日本政府から1円の補償もない。

思いやりを欠く戦後補償を省みることなく、3000万の金をつぎ込んで自画自賛の日本語の碑を異郷の公有地に建てるというのは、いささか常軌を逸する。新植民地主義だという非難の声が出て反論の仕様がな

黄玉緞さんは、日本のニュースもよ

く見ていて、小泉さんには引き続き靖国に参つて欲しいという。そうした声は台湾の元日本兵のなかにもあるが、それはお国のために戦つた我々を忘れないで欲しいという悲痛な叫びであつて、戦争犯罪人を肯定しているわけではない。我々はそうした言葉をもらさざるをえない人びとの苦悩を察してあげるべきではなからうかと思うのだが、大和魂を礼賛する碑を建てることはあつても、彼らの老後を支援しようという声はついぞ聞かれないのである。

以来、黄さんからは毎週のように読めない葉書が届く。「面会後の乏しき夕餉」「小田原の大粒梅干沢庵ニキレ恋し」「立てぬもどかし我が足の抹消に血が届かぬ」。字を忘れてはならぬと白板に字を書き連ねる毎日。そしてベッド脇に張られた日本の友人からの葉書をなぞるように読み返す毎日。元大日本帝国陸軍看護婦・川島繁子さんと黄玉緞は鉄格子の入つた小さな窓からはるか日本を見つめている。

やなぎもと・みちひこ

京都市生まれ。99年度「潮賈」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たちの聖戦」(現代書館)、「台湾革命」(集英社新書)、「明治の冒険科学者たち」(新潮新書)など。最新刊に「ノンフィクションの現場を歩く 台湾原住民族と日本」(かわさき市民アカデミー出版部)